



乱菊の太刀

早乙女貢

青樹社



貢

乱菊の太刀

定価 350 円

昭和44年6月20日発行

著 者	早 乙 女	貢
発行人	土 井	勇

東京都千代田区三崎町2—6—7 青 樹 社

電話 (261) 9766 番・(263) 7267 番 振替東京 47648 番
落丁・乱丁本はお取り替え致します

乱
菊
の
太
刀

目次

乱菊の太刀

五

千鳥の群盗

六

白夜の群盗

二三

武蔵野の群盗

二四

伊予の群盜

二八

魔性の笛

二九

百合若奇譚

三〇

啾々あずま歌

三一

装幀 玉井ヒロテル
さしえ 浜野彰親

乱菊の太刀



HAMANO

一

平安京の男たちは老若おしなべて、輕薄な才子が多い。そのせいもあるうが、誰もが、口をそろえて、

——お美しい……

——お若い……

と、依子のことを褒めそやす。

普通ならば、蕩爛けて、身分にふさわしい落着きと品位が窺える年配であつた。にもかかわらず、依子は、三十路に間があるような、いな、相手によつては二十歳そこそこになりすますこともある。

お若い、かどうかは、だから、兎も角として、美しい、というのが表面だけの意味ならば、花丸も認めるのに吝かではない。

したたるばかりの黒髪と、衣服のうちの、豐滿な姿体を想わせる豐頬、甘くねっとりした声音、そして双眸——瞳は小さく、半ば瞼に蔽れていたが、男を見るとときには、異様に、妖しいひかりを放つのである。

花丸は、そのときの眼つきをするときの叔母が——叔母といつていいであろう——嫌いであつた。もじもじとして、帰る気配を見せると、

「急がずともよいではありませぬか？ それとも、どこぞの姫へ恋文書く閑が惜しいかえ？」

「いや、そのようなことでは」

女のような、白桃を思わせる頬に紅葉が散るのを、

「ほほほほ」と、こちよげに笑つて、

「気恥かしいことはない。そなたも、もはや十八、恋文書くの之急がしいがことわりなれば……」
ちら、と、花丸の瞼の裡を、千里のおもわがかすめた。

故郷の備前の小島にいるはずの処女の、たおやかな容姿であつた。

「叔父上は、まだ御帰館ではありませぬか」

帰るきつかけをつかむつもりで、訊くと、

「間もなく戻りましょう。そなたに、何やら話したい儀があるとやら」

「——では、あの、明朝にでも。もう夜も更けましたれば」

「これ、そのように急がずとも、まだ西の空は茜に映えたばかり」

「でも……」

「よいではないかえ、のう、恋文といえ、万葉をそらんじての後に、筆をとるが、もっともたしかな道とやら。わたしも近頃きつう歌好きになつて……苅り薦の一重を敷きてき寝れども君とし寝れば

寒けくもなし。この歌なぞ大好き……」

花丸は、また、おもてを赤らめた。

「まだありますぞえ、朝寝髪われは梳^{すく}らじ美しき君が手枕ふれてしものを。ほほほほ」
嬉しそうに、からだくねらし、

「もう一つ、眉根かきはなび紐解け待てりやも何時しか見むと思へる我が君……こんな気持を、そなた、知るまいのう」

「叔母上……」

「ほほほほ、ほほほほ、ほほほほ」

笑いながら、嗤いながら、凝ッと、瞳は、花丸の瞳を、見つめていた。

若者の狼狽を揶揄するような視線のなかに、妙に、真摯なものが感じられて、一層、花丸はあわてた。異様に、心が騒いだ。

その心の騒ぎを、凝ッとのぞきこんだまま依子は、つと腕^{かいな}をのぼして、

「優しくな、ほんに女子に見まほしげな……」

花丸の掌をつかんだ。

「叔母上……」

「ほほほほ、何をおずおずするぞえ？ よい若者が。手をとられるも千里ならば、嬉しかろうに、ほほほ、あいにくにの」

知っている！

何故か、ぎくりとした。

「ほほほほ、せっかくの恋路も、ほほほほ」

「戻りまする、叔母上、手を」

「戻りやるか、戻りやるか、花丸」

「叔父上によしなに——明日あらためて……」

未練がましく熱っぽい視線に背を灼かれる思いで、広廂から簀ノ子縁に出た。身内が、妙に火照っていた。

妻戸にぶつかりながら、透渡殿へ踏みだすと、

「九郎次」

と、車宿へ、どなった。

その眼に、ちらりと、紅梅いろの小袖が、中門のかげに見えた。

宵闇のなかに、恥じらい咲く草花にも似た白いおもわとともに——

——何であろうか？

——わからぬ、が……

——何かある、何かが……？

葦毛^{あしけ}をうたせながら、花丸は、思いめぐらしていた。

藤原ノ保道^{やすみち}の殿舎^{やしき}から退出するとき、以外なことを耳にしたのである。

——あの端女は、こずえとかいう名だったが……

日かげの花のように、内気で、おどおどしている娘だった。遠くから、いつも、そっと花丸を眺めていた。目が逢うと、悪いことでもしたように、長い睫を伏せ、逃げるように、雑舎に去ってゆく。

そのこずえが、今宵は、轅門^{ながえもん}から退出しようとする花丸を追ってきて、

「帰途、御用心なされませ」

のびあがるようにして、一言、囁いたのである。

「何、何ごとが?……」

問い返そうとしたとき、依子の侍女の姿が見え、こずえは、あわてて、駆け去った。

——冗談^{わやく}をいうはずがない……

声音の真剣さ、思いつめた瞳に、尋常ならぬ光りを、見てとったのである。

世はいわゆる平安朝であった。

遷都以来、百余年、みやこは平安どころか毎日、怨嗟と苦悶の声に満ちていた。

平安は台閣の人々のみに吸いとられて、庶民は苛酷な税と強盗の横行とで飢餓に頻している。

いうまでもなく、宏荘にして華麗を誇る殿舎仏閣は、藤原氏一門か、その息のかかった人々によって占められていた。藤原一族の圧政に幾らかでも反省を与えようとした者の末路は、遠い昔を見ずと

も、菅原道真の筑紫配流が何よりもこれを如実に物語っている。

その庄政と搾取の実態は、“花のみやこ”のありさまを、一瞥すればわかる。

東西一里五丁、南北一里十二丁の、唐朝の規模を摸した、みやこそのものが、天国と地獄をくつきりと現出していたのである。

大内裏十二間、八省の官衙殿堂は、丹塗の門廊、孔雀いろに映ゆる薨にいろどられ、横縦七十二筋の大路小路を、遅しげな黒牛に曳かれゆく華やかで色とりどりの輦、そして、うす絹、綾絹に飽食の身をつつみ、歌を口ずさみながら行き交う公卿美姫の殿上人たち――

そのさまを、この世の極楽と見るなら、内裏を中心としてこの碁盤目にくぎられた町すじを、少し離れたところには、泥にまみれた庶民の、氣息奄々たる姿がある。

右京の三分の一、左京は四分の一が、まだ田や畑を残し、雨期には氾濫する小川であり湿地には常に、メタンガスが泡だち、或は蚊の温床となり、死臭を漂よわしていた。

流行病いや飢えで斃れた男女を、そのまま投げこみにしたからである。

小路は、雨後なお膝を没し、炎暑がつづくや、牛車もねじり倒す峻しい凸凹の道となり牛の糞が黄塵と化して、舞いあがった。

金蠅、青蠅の群れとぶ異臭のなかで、庶民の多くは、藁や板のいぶせき小屋で雨露をさけ、東山々麓には、穴居時代から、幾ばくの進歩もないような生活すら見られた。

極楽と隣りして、地獄があったのだ。

飢えに迫られ、榮華を目のあたり見た男たちは盗みに走った。

強者は引剝、強盜し、弱者でも、女子供を襲い、目を掠めての置引などで僅かに胃の腑を満たしている。

夜盜が増えたのも政治の貧困がさせた当然なら、それが群れを為して聚り、組織を持つに至ったのも当然であろう。

——偷盜が、まろを襲うというのか？

花丸は、葦毛を急がせながら考えた。

——まろをとらまえて、身の代銀をゆする……ありそうなことだが……

彼は微笑した。

——和氣ノ庄にゆかねば何ほどの銀もない……

故郷備前和氣ノ庄鹿久居島に父祐則の居館がある。

花丸、五年ほど前から京へ出ていた。

——さきほどの便りによれば父上は隔噎（喘息）の病いが嵩じたとのこと、如何あらせられるか……

——弟霧丸も変りなく木登や太刀打ちなどして島をとびまわっていることであろう……

瀬戸の内海の、おだやかな小波にかこまれた、風光明媚な故郷の島が思いだされる。

そして、京ぶりの、美しい容姿でそぞろ歩く千里の姿が……

——もはや三月ほど見ぬ。一段とあでやかになっているのではあるまいか……

「九郎次よ」

と、花丸は、いった。

「故郷へ戻りたくはないか」

「戻りたいの段ではござりませぬて」

騎馬に従って走りながら、九郎次は、にッと、皓い歯を見せた。

「もう京には飽き飽きしましたわい、どっちやを向いても屑のような人間どもで、花のみやこが聞いて呆れますわの」

「はははは、そのようなことは、大声で申すまいぞ」

主従が、声を合わせて笑ったとき、ふいに築牆つきののかげから、幾つかの影が、おどりだしてきた。

「あつ、怪しの者どもが」

九郎次が、野太刀の柄に手をかけて、馬前にとびだす。

「何やつ?!」

手綱を持ちかえて、佩はき太刀に右手を走らせながら花丸は、

「夜盗か、うぬらッ」

大喝した。

そこは五条大路から東洞院の通りを少しのぼった、丁度紅梅殿の裏あたりであった。

——こんなところで、夜盜が……

まだ宵のくちだ。

検非違使も見まわっているところである。

——したたか者どもが……

そう思った瞬間、卒然として、こずえの忠告が、脳裡を掠めた。

「ぬかるまいぞ、九郎次」

蝗のように、とびついてきた黒い影に、轡をとらせず、前脚で蹴倒した。

「おう！」

九郎次の抜刀に誘われたように花丸の手にも、白刃が閃いた。十八とはいえ、島で幼時を育っているからすぐれて上背があり、膂力も、また他に劣らない。

無言である。瞥見したところ十数人、手に手に棒を持ち、競って打ちかかる。

「ちえッ！ ちえッ！ ちえ!!」

太刀で、払いのけ、腕を薙ぎ、葦毛をあふって、蹴倒し、はねとばした。

月があるはずだったが秋も爛けて、時雨をもよおした闇の夜。申しわけばかりの星屑が、雲の切れ間に喘ぐように、かすかな瞬きを見せているばかりで五条東洞院ノ大路は昏い。

何故、この襲撃をこずえが知っていたか？ 彼奴らは何故抜刀しないのか？ 乱闘のあいだにも、

その思いが、こびりついていた。